《研究ノート》

二つの『マカーマート』に見られる奴隷像

波戸　愛美

この研究ノートは、アッバース朝期の代表的なアラビア語文学作品であるハマダーニー（九六七～一〇〇八頃）とハリーリー（一〇五四～一一二二）のマカーマートに描写される奴隷像を紹介するものである。

アラブ中東社会に独特の形で根付いていた奴隷の姿は、軍事奴隷で支配層となったマムルークをのぞけばその描写を歴史史料に探ることは困難である。しかしアッバース朝期を代表する文学作品であるハマダーニー、ハリーリーのマカーマートの二作品はそれぞれ分量は異なるが、歴史史料には描かれない奴隷の姿が散見できる。それに加え、いわゆる事実を重んじる歴史史料とは異なる作者の意識や視線を通した奴隷の見方が表れている。

一　作品解題

マカーマート Maqāmāt とは説話形式の物語を指すアラビア語であり、古典アダブ文学を代表する作品であると評価されている。一〇世紀にハマダーニーにより創作され、一一世紀にハリーリーによって完成されアラビア語散文文学の一形

式となった。

マカーマートとはアラビア語で場所 maqām という単語の複数形である。章の表題は先に書かれたハマダーニーのものは後述のアザーズなどの名称が用いられているが、ハリーリーはダマスカスなど有名な都市をその表題に構え形式をより洗練している。

形式は、両作品とも主人公は手練手管に富んだずる賢い詐欺師であり、様々な縁によりその詐欺の場に居合わせた語り手がその詳細を語るという形式である。主人公である詐欺師は鮮やかな手法でさまざまな場所で詐欺を働き、上手く金品を巻き上げる。彼が立ち去った後で、語り手は騙されたことに気づくのであるが、詐欺師の機知に舌をまいて終わる。

但し、ハマダーニーのマカーマートはマカーマート形式の嚆矢である作品のためまだ物語の形式や表題の規則などが確立されておらず、またその内容も多種多様である。

文体はサジュゥと呼ばれる押韻散文であり、難解かつ凝った文体で書かれている。特にハリーリーのマカーマートはそれが顕著な特徴である。

二　ハマダーニーのマカーマートに見られる奴隷

作者ハマダーニーは名を Abū al-Faḍl Aḥmad ibn al-Ḥusayn ibn Yaḥyā ibn Sa'īd ibn Bishr al-Hamadhānī といい、イラン西北部の都市ハマダーン（ペルシア語読みではハマザーン）に生まれた。ブワイフ朝下ライイの宰相に招かれ仕えた言語学者イブン・ファーリス（一〇〇四没）や伝承学者イブン・ヒシャームに師事し、ペシャワールなど東部アラブ世界各地を旅し学問の研鑽を積んだ学者である。代表作であるこのマカーマートは約五〇編が現存しているが、散逸した話も多数存在するとされている。

代表作であるこのマカーマートはアラブ古典文学の傑作のひとつに数えられ、ハマダーニーは時代の驚異 Badi'al-zamān とも呼ばれる。

この作品には「奴隷」を主題やモチーフとした物語は約一世紀後に成立したハリーリーのマカーマートとは異なりただのひとつも存在しない。

しかし、このハマダーニーのマカーマートはモチーフまでにはならないものの、日常生活に根付く召使としてのアブド、グラームといった奴隷が登場する。奴隷は物語の主題にはなっていないが、生活に根付くものとして自然に描写されていることが指摘できる。他方、後述するハリーリーのマカーマートには奴隷を主題とする物語自体は存在するが、奴隷自体はモチーフとなった作品以外にはほとんど姿をあらわさない。

以下、奴隷を表す用語であるアブド、グラームの用例をあげる。

最初にアブドの姿が描かれているアザーズのマカーマ[1]を例示する。

> イーサー・ブン・ヒシャーム（語り手）は次のように言った：
>
> 私はバグダードに滞在しておりました（ころ）、時はアザーズ種のなつめやしの旬の折でした。私はその中でも特に良きものを買おうと出かけました。程なくして私は奴隷（'abd）ではない自由人の男（rajul、ここでは商人を指すと思われる）が果物の等級を仕分けしているのを見つけ……（以下略）

ここでは最初に目に入った果物屋の主人が奴隷ではない自由人の男であることを強調している。奴隷でなく主人自身が売っていることを重要視しており、自由人か否かが果物屋としての信用の判断基準になっていることがわかる。

次に、グラームの姿が描かれているマディーラのマカーマ[2]を例示する。

語り手であるイーサー・ブン・ヒシャームは宴の席で主人公であるイスカンダリー（博識と雄弁を備えるが性格に問題がある人物）からマディーラという未知の食べ物についての語りを聞く。イスカンダリーがバグダードに滞在した際、とある商人にマディーラなる食べ物を家で食べようと誘われる。以下はその商人宅の描写である。

私たちはマディーラの話に戻ったが、既に昼の時刻になっていた。（商人は言った）。若者（ghulām）が水を持ってやってきた。私は言った。「神は偉大なり！　しかしながら喜びは心にある」（中略）

そして若者がやってきた。商人は次のように述べた。「この若者（ghulām）を見てください！　彼はイラクに祖を持つルウム人なのです！」[3]

ここでは、商人の家に使える召使としてのグラームの姿が描かれ、そのグラームの事を誇らしげに語っている。

最後に、獅子のマカーマに出てくるハーディムの用例を紹介したい。この章ではハーディムという言葉が詩に詠まれている。語り手であるイーサー・ブン・ヒシャームが途中ライオンや盗賊に襲われながらも何とかシリア北部の町ホムスに辿りつき、スーク（市場）で荷物を降ろしているとそこで幼い子供を後ろに立たせている物乞いの訴えを耳にする。その訴えは軽調で韻を踏まれた詩で詠まれており、おそらくその素晴らしさから主人公はその物乞いが自分が会ってみたいと思っていたアレクサンドリア出身のアブー・アルファトフであることに気づくという筋書きである。

神の慈悲が以下の方にありますように　私の旅装袋をその寛容さで満たして下さる方に
神の慈悲が以下の方にありますように　サイード家とファーティマ家に属する者を見る方に

実に彼（後ろに立つ息子）はあなたの召使（ハーディム）であり、また彼女は（また）疑いようも無くあなたの召使

（ハーディマ）である[4]

これは名のある人物であるアブー・アルファトフがゆえあって物乞いをするときに自分の子供たちを召使に例えている詩となっている。よって、ハーディムという用語は奴隷を指す場合は特に宦官を指すことになるので、この場合は奴隷の意味合いではなく召使という職能的な用法で使われていることになる。

このようにアブド、グラーム（ただしグラームに関しては自由人としての使われ方の方が多い）、ハーディム（召使としての使われ方の方が多い）といった単語がハリーリーのマカーマートと異なり頻出する。ハマダーニーのマカーマートでこのように召使としてのハーディムが主で奴隷を指す用法がほぼないことによって、ハーディムという用語が宦官を指すようになったのはもっと後代になるのではないかという推論も導き出せる。

ただし、奴隷というモチーフ自体を主軸にした話、もしくは主要登場人物とした話は存在しないことに留意したい。その理由としてはマカーマートは共に知識人である語り手が主人公に騙される実話形式を意識する物語であるため、後世に成立しフィクションの要素が強い千夜一夜物語に出てくる奴隷のように特別な才能がある奴隷は出てこず、当時人口に膾炙していた召使としての奴隷の姿が主に描かれたのではないだろうか。

三　ハリーリーのマカーマートに見られる奴隷

作者であるハリーリーは名をMuḥammad al-Qāsim ibn ʿAlī ibn Muḥammad ibn ʿUthmān al-Ḥarīrī といい、イラク南東部の都市バスラに生まれ、言語学・法学を学び書記官や学者の地位についていた。ハマダーニーのマカーマートに大いに影響を受け、書いた著作が人気を集め、アダブの中でのマカーマートというジャンルを大成した。他には詩集・文法書なども

記した。

ハリーリーのマカーマートに関する奴隷の描写は、ハマダーニーと大きな差がある。ハリーリーのマカーマートには奴隷を主題とした物語が存在する。ただし、その数はたったひとつであり、逆にこれ以外の物語には端役としての奴隷の記述すらほとんど存在しない。

つまり、前述したハマダーニーのマカーマートとの異なり、奴隷をモチーフとしない話ではアブドなどの奴隷自体を指す用語や登場人物が著しく少なく、奴隷を主人公やテーマとした話はなくとも奴隷自体の描写は多かったハマダーニーのマカーマートと奇しくも逆になっている。

では、奴隷をモチーフとした話はどのようなものであろうか。第三四話　ザビードのマカーマ[5]の例をあげる。

（あらすじ）

語り手であるアル・ハーリス・イブン・ハンマームはイエメンの紅海近くの町、ザビードまで陸路で旅をする。しかしたどり着いたザビードで彼は幼少の時から育て、教育や知識を施し旅に同行させていた若い黒人奴隷（ʿabd）を亡くしてしまう。アル・ハーリスの悲嘆は深く、一年の間食事もろくに喉を通らず、代わりの奴隷を求める気すら起きなかった。

しかし一人で過ごす辛さと手間が高じ、真珠と言わずガラス玉でもいいから手に入れてみようかと思い立ち、ザビードの奴隷市場に向かう。まず奴隷商人たちに若くて能力の高い奴隷を求めるが、何か月たってもつれては来ない。そこでハーリスは自身で白色人種・黄色人種を扱う奴隷市場に出かけ、自分の目で奴隷たちを確かめた。そうこうしているうちに、顔を面紗で覆った一人の人物に出会った。彼は一人の若者（ghulām）の手をつかんでおり、詩を吟じた。（中略）

若者の姿勢の良さ、美しい姿にハーリスは目を奪われた。彼はまるであのなめらかな天国からやってきた天使の一人かと思わせる風貌であった。ハーリスは思わず言った。「ああ、この子供は人間であろうか。どう見ても高貴な天使にしか見えない。」それからハーリスは彼に質問をいくつも行うが、全く答えようとしない。怒ったハーリスは言語障害がある

のでは話にならない、とその若者を追い払おうとすると突然その若者は笑いだし、クルアーンの引用を用いた詩で洒落た返答をする。その答えに感服したハーリスは主人と値段交渉に入り、ハーリスは多額のお金を主人に払う。若者は泣きながら主人に別れの詩を読む。（中略）

すると若者の主人は、私はこの若者をわが子（walad）のように扱ってきた、もし我が家が貧乏でなかったらこの若者は私をみとってくれるはずだったのに、といい、取引を私の気が済むまで中断してはくれないか、とまたクルアーンの引用を用いて言う。ハーリスはそれを了承し、若者の主人は立ち去る。

残った若者と話をしているとまたハーリスを侮辱する言葉をいったがため、二人は殴り合いのけんかになり事態は法廷に持ち込まれる。

そこで驚くべきことが明らかになる。若者の主人はアブー・ザイド（ハリーリーのマカーマートの主人公である詐欺師）であり、彼が法廷でも力を持っているということ、何より若者は彼の息子であり自由人であるがためにこの売買契約自体が無効であるということである。

アブー・ザイドに幾度となくだまされてきた語り手ハーリスは歯をきしませて悔しがるという場面で物語は幕を閉じる。

これは、「自由人は法律上売買されてはならない」という原則を用いたレトリックが使用された物語であると言える。また、アッバース朝期から奴隷を育てあげる慣習が存在したこと、当時の奴隷市場の様子の描写は興味深い資料になりうる。

そして着目すべき点は、当初から語り手であるハーリスが奴隷と共に旅をしていたことである。この奴隷は（ʿabd）と書かれていることから黒人奴隷であり、後に出てくるアブー・ザイドの子供が（ghulām）と書かれていることと対照的である。

また、奴隷と共に旅をしていたことに加え、その黒人奴隷が亡くなった時の悲嘆の描写もかなり大きなものとなっている。これは、奴隷と主人がどれだけ近しい存在であったかを表す描写であるといえよう。黒人奴隷が主人の人生の伴侶とするほど必要とされ、愛されていたともいえる。

四　奴隷を通した文学作品の比較にむけて

一〇世紀に書かれたハマダーニーのマカーマートと、一一世紀に書かれたハリーリーのマカーマートとそれらに描かれている奴隷像について紹介した。

以上を踏まえてこれらの二作品を比較してみると、次のような結論を述べることができる。

まず、ハマダーニーのマカーマートでは、奴隷を主題・モチーフとした作品は一切存在しない。ただし、店先の人物を奴隷か自由人かを判断するといった所作のように奴隷が社会の中に溶け込んでいたことを示す描写が非常に多い。

次に、一一世紀に成立したハリーリーのマカーマートでは、ハマダーニーのマカーマートと異なり、奴隷は一つの作品以外にはほぼ出てこない。描写もほとんど存在せず、ハマダーニーのマカーマートとかなりの違いがあるといえる。

しかし、奴隷をモチーフ・作品の主題とした『ザビードのマカーマ』ではハリーリーは冒頭の導入で主人と奴隷との共感を描いているが、それ以外の場面で奴隷を端役でも登場させることは無かった。しかし、ハマダーニーは奴隷と主人との密接な関係や、奴隷への共感は現れていない。これは作者の約九〇年という出生年代の差に起因するのではなく、次のような作風やメンタリティ、叙述対象の違いであるように思われる。

ハマダーニーはマカーマートの創始者であるがゆえに形式が完成されていない、また主人公と語り手の役割も固定されていない多様なマカーマを記した。ハマダーニーのマカーマートでは主人公、語り手共に相手を騙し騙され、時には罪す

ら犯すため多様な場面や登場人物が語られる。これに対してハリーリーのマカーマートは主人公は詭弁をもって語り手を騙すがあくまで知識人としての手法であり、その知識と雄弁でもって報酬を受け取るのである。このような作風の違いからハマダーニーの作品では市井に広くみられる奴隷の姿が登場するが、主題とすることは無かった。ハリーリーは確立した型にはめた知識人の語りの応酬を主題としたがために、市井の奴隷は対象とならず、話の仕掛けとして奴隷のレトリックが使われた一話のみに奴隷の記述が現れたと考えられる。また二つのマカーマートにおける奴隷の描かれ方は、同じくアッバース朝期に書かれたジャーヒズ（七七六頃―八六八／九）の『書簡集』とも異なっており、後者は著者自身が奴隷という存在やその社会的役割に関心をもっていた。

より後世に成立し一四世紀に記された物語集『千夜一夜物語』ライデン版では、さまざまな奴隷が多数登場し（拙稿を参照）、その姿はマカーマートやジャーヒズといったアッバース朝期の文学作品とも異なる。千夜一夜物語は民衆向けの語り物で市井の生活を色濃く反映し、また語り物ゆえに、能力の高い奴隷（学者と論争して勝利する奴隷やスルタンになる女奴隷など）の話が好まれた[6]可能性がある。

今後の課題として、詩など韻文作品でのモチーフや奴隷像の違いを探る必要性がある。散文では奴隷の事例が限られており、散文との共通点や相違点を比較することが可能となる。

主要史料

al-Jāḥiẓ, *Rasā'il*, ed. 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn, 4 vols.（Cairo: Maktaba al-Khānjī, 1964-79.

Maqāmāt Abī al-Faḍl Badī' al-Zamān al-Hamdhānī（969 ～ 1008）, Bayrūt : Dār al-Mashriq.2010.

（英訳） *The Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamādhānī* / translated from the Arabic with an introduction and notes, historical and grammatical by W. J. Prendergast, London : Curzon Press,1973.

（邦訳）　堀内勝、アル・ハマダーニー著『マカーマート』（一）、『イスラーム世界研究　第五巻一～二号』、二二六～二九八頁、二〇一二。

al-Maqāmāt : maqāmāt al-Ḥarīrī, Dār al-Mashriq, 2011.

（仏訳）　Chenery, Thomas tr., *The assemblies of al Ḥarîri* / translated from the Arabic, with an introduction and notes historical and grammatical, Farnborough : Gregg International,1963.

（邦訳）　堀内勝、アル・ハリーリー著『マカーマート　中世アラブの贈り物』全三巻、平凡社、二〇〇八―二〇〇九。

Muhsin Mahdi, *The Thousand and One Nights（Alf Layla wa Layla）from Earliest Known Sources: Arabic Text Edited with Introduction and Notes,* 3 vols., Leiden, 1984-94.

（英訳）　Husain Haddawy, *The Arabian Nights Based on the Text edited by Muhshin Mahdi,* New York & London, 1990.

研究文献

（欧米諸語）

Forand, Paul G., “The Relation of the Slave and the Client to the Master or Patron in Medieval Islam”, *International Journal of Middle East Studies* 2, 1976, pp. 59-66.

Grabar, Oleg, *The illustrations of the Maqamat,* Chicago : University of Chicago Press, 1984.

Gerhardt, Mia, *The Art of Story-Telling,* Leiden, 1963.

Gordon, Murray, *Slavery in the Arab World,* New York, 1987.

Goitein, S.D. “Slaves and Slave-Girls”, *Mediterranean Society,* vol. 1, Berkeley, pp. 130-147, 1967.

Lewis, B., *Race and Slavery in the Middle East: An Historical Enquiry,* Oxford, 1990.

Lovjoy, P.E. ed., *Slavery on the Frontiers of Islam,* Princeton, 2004.

Marmon, Shaun E., *Eunuchs and Sacred Boundaries in Islamic Society,* New York,1995.

Miura, T. & J.E. Phillips. *Slave Elites in the Middle East and Africa,* London, 2000

Müller, Hans. Skalven , Lewis, Bernard. ed. *Geschichte der islamischen Länder: Wirtschaftsgechichte des Vorderen Orients in islamischer Zeits*, 59, 1977.
Segal, Ronald, *Islam's Black Slaves : The other Black Diaspora*, New York : Farrar, Straus and Giroux, 2001.（邦訳：シーガル，ロナルド・（設楽國廣・監訳）『イスラームの黒人奴隷』明石書店、二〇〇七）

（和文）
岡﨑桂二「『マカーマート』の演劇性――メタモールフォシス・カタルシス・ダイクシス――」『四天王寺大学紀要三九』二〇〇五
――――「『マカーマート』における医療のトポス――蘇生術、産婆術、預言者の医術――」『四天王寺大学紀要四七』二〇〇九
佐藤次高『マムルーク』東京大学出版会、一九九一
清水和裕「グラームの諸相：アッバース朝におけるイエと軍事力」『西南アジア研究』五二、三八～五八頁、二〇〇〇.
――――『軍事奴隷・官僚・民衆』山川出版社、二〇〇五
――――『イスラーム史の中の奴隷』山川出版社、二〇一五
辻大地「アッバース朝期のセクシュアリティと同性間性愛：ジャーヒズ著『ジャーリヤとグラームの美点の書』の分析を通じて」『東洋学報』九八（四）、二〇一七
波戸愛美「イスラム世界における女奴隷：『千夜一夜物語』と同時代史料との比較」『F-GENS ジャーナル』九、二〇〇七.
――――「一四―一五世紀アラブ中東社会における奴隷の用語法」『地域文化研究』四、二〇〇八
――――「マムルーク朝時代の奴隷像：『千夜一夜物語』，『大旅行記』，『日録』の比較から」『日本中東学会年報』二四―二、二〇〇九
――――『アラビアン・ナイトの中の女奴隷』風響社、二〇一四

註

（1） Maqāmāt Abī al-Faḍl Badīʿ al-Zamān al-Hamdhānī, Bayrūt : Dār al-Mashriq.2010, p.35.
（2） Ibid., p.112.
（3） Ibid., p.118.
（4） Ibid., p.42.
（5） *al-Maqāmāt : Maqāmāt al-Ḥarīrī*, Dār al-Mashriq, 2011, pp.245 ～ 269.

（6）波戸愛美『アラビアン・ナイトの中の女奴隷』風響社、二〇一四、三七～四五頁。

（お茶の水女子大学大学院博士前期課程三九回生）